三軒屋遺跡発掘調査概要

農用地整備事業下村地区に伴う発掘調査

1998・3

大阪府教育委員会

はしがき

三軒屋遺跡の所在する泉佐野市は大阪府の南部にあり、近年関西空港関連事業にともない多くの発掘調査が実施されております。新たな遺跡の発見も多く、また、発掘調査の成果が新聞紙上をにぎわすことも多くなりました。

泉佐野市域では九条家絵図にみられる日根荘や今回調査いたしました三軒屋遺跡等、著名な遺跡が存在しております。

今回の発掘調査は農用地総合整備事業下村団地造成に伴い実施いたしました。調査の結果、弥生時代の住居跡等を検出することができ、集落の範囲を考える上で重要な知見を得ることができました。今後は周辺地域の調査がさらに重要となってきます。

調査にあたっては、地元の方々や関係機関の皆様に多大なるご協力を得ることができ、ここに感謝の意を表するとともに、今後とも、本府文化財保護行政に対し一層のご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成10年3月

大阪府教育委員会文化財保護課長

鹿野一美

例　　言

1．本書は大阪府教育委員会が農用地整備公団の委託を受け実施した農用地総合整備事業下村地区にかかる三軒屋遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．調査は大阪府教育委員会文化財保護課調査第１係技師森屋直樹を担当者として、平成９年12月26日着手し、平成10年３月20日終了した。遺物整理については、文化財保護課資料係地村邦夫が担当した。

調査の実施と概報の作成にあたっては、上之郷土地改良区、泉佐野市教育委員会鈴木陽一、中岡勝、貝川克士諸氏のご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

3．本書の執筆、編集は森屋が行った。

目　　次

はしがき
例言
第１章　はじめに
第２章　調査の成果
第３章　まとめ

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（S＝1/20,000）
第２図　調査区位置図（S＝1/5,000）
第３図　竪穴住居015平面・断面図（1/50）
第４図　調査区平面図・断面図（１）
第５図　調査区平面図・断面図（２）
第６図　出土遺物実測図

図　版　目　次

図版１　上段：調査区北半部全景（南から）、下段：調査区北端部（南から）
図版２　上段：溝001（北から）、下段：溝007・008（西から）
図版３　上段：溝007・土坑004・005（南から）
下段左上：足跡検出状況、下段左下：足跡完掘状況
下段右上：土坑005（南から）、下段右下：溝002（北から）
図版４　上段：流路001（北から）下段：溝010（西から）
図版５　上段：調査区南半部（北から）下段調査区南端部（北から）
図版６　上段：土坑013（南から）下段：竪穴住居015（南から）
図版７　上段：竪穴住居015（東から）下段：竪穴住居015（南から）
図版８　上段：竪穴住居015内中央ピット017断面（南から）下段ピット025周辺（北から）
図版９　上段：調査区南端部全景（北から）下段：集石遺構（南から）

農用地整備事業下村地区に伴う

三軒屋遺跡発掘調査概要

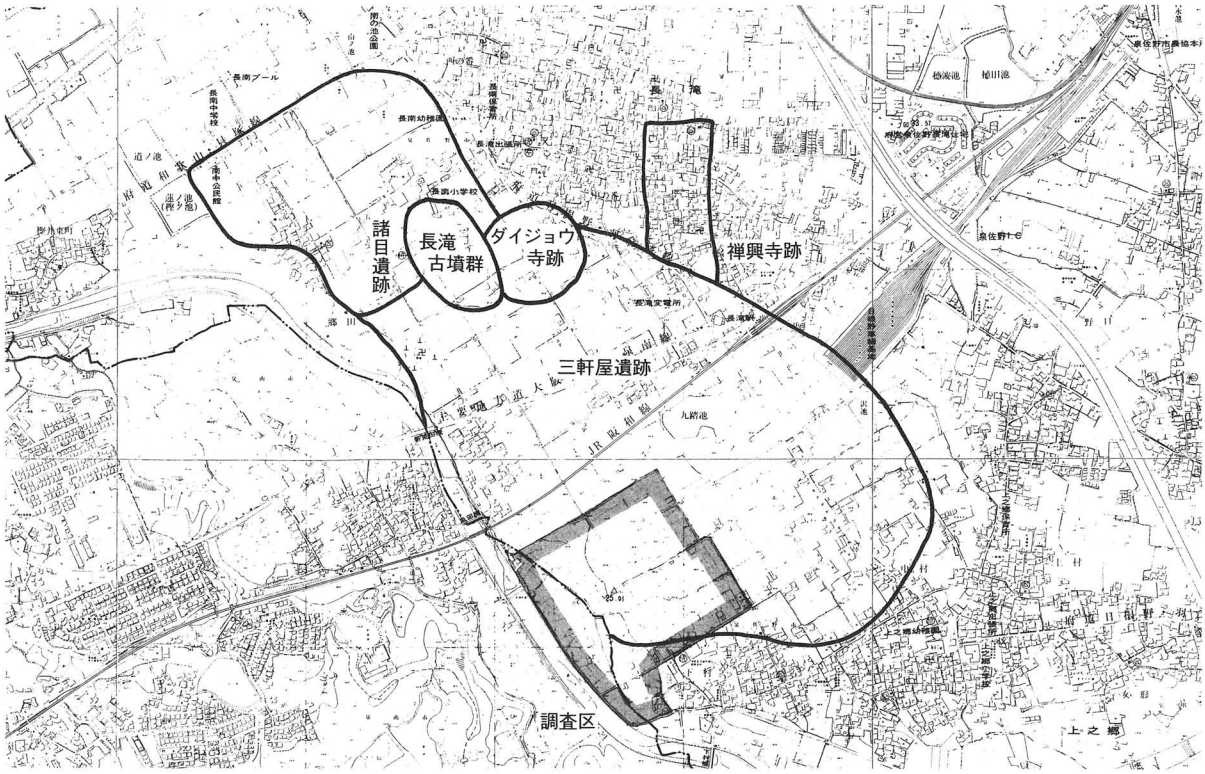
第1章　はじめに

三軒屋遺跡は、泉佐野市の西南部、樫井川右岸に広がる低位段丘上に位置する縄文時代後期から近世まで連綿とつながる複合遺跡である。本遺跡の北側には、古墳時代中期から後期まで造営された長滝古墳群や白鳳時代の建立とみられる禅興寺跡が所在しており、南東には平安時代の官衙的配置の掘立柱建物群などが検出されている上之郷遺跡がある。さらに東側には中世の周溝によって区画された居館跡が検出された机場遺跡が所在する。

三軒屋遺跡では、遺跡の南端、樫井川の右岸に近いところの狭い範囲で縄文の集落が確認される。弥生時代になると、遺跡の北東部でも住居跡や、方形周溝墓などの遺構が検出されており、

今回の調査成果からも、複数の小さな集落が点在することが伺われる。また、中世になると集落の中心は遺跡の東側、現在の上之郷集落に近いところに移っていくようである。

農用地整備公団が施工する、泉佐野市上之郷及び泉南市兎田地内における農用地整備事業下村地区については、計画段階から農用地整備公団西部総合事務所、大阪府耕地課、泉州農と緑の耕地事務所、泉佐野市農林水産課、泉南市農林水産課、泉佐野市教育委員会、泉南市教育委員会、本課の関係機関で予定地内に所在する三軒屋遺跡の取り扱いについて数度にわたる協議を行った。

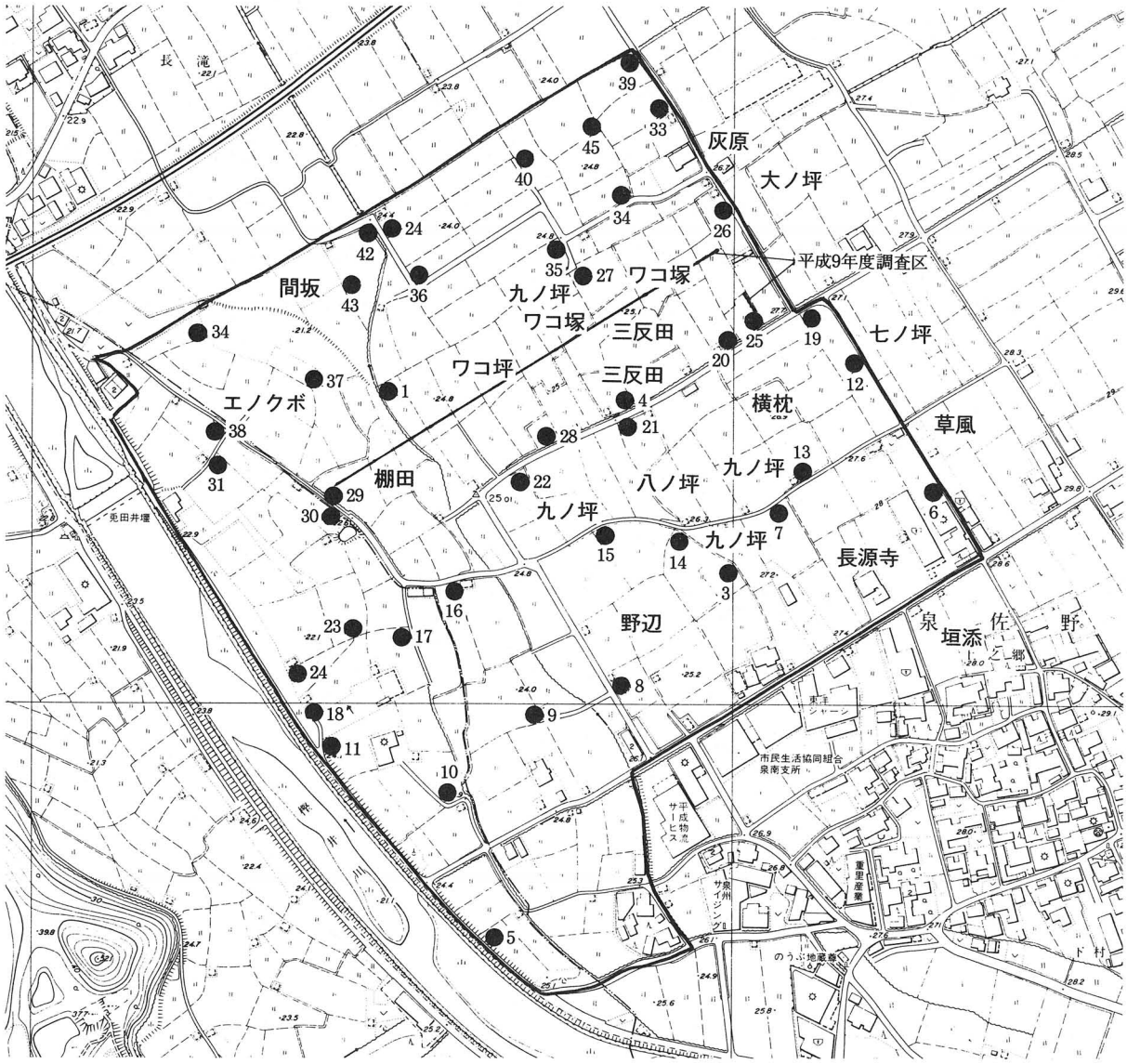


第1図　周辺遺跡分布図（S＝1/20,000）

その結果、試掘調査については泉佐野市教育委員会で実施し、本調査及び遺構保存等の協議については本課が実施することで合意を得た。

試掘調査は、泉佐野市教育委員会が平成９年２月～３月に実施した。その結果によって樫井川の右岸に広がる氾濫源については、調査範囲からはずすこととし、工事によって遺物包含層及ぶ遺構面が損壊するおそれのある水路部分について本調査を実施することとした。

今年度は、12月に農用地整備公団と契約を締結し、調査は２月～３月に実施した。今年度の調査対象は水路300m分である。調査は、耕作土と調査による掘削土との混濁をさけるため、調査ヤードも含め幅20mで耕作土を機会掘削し、水路部分の幅２ｍを人力で調査掘削を行った。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/5,000）

第２章　調査の成果

１．層序

調査区の現状はすべて水田利用されており、調査区北東から南西にかけて、樫井川に向かって下がっている。旧地形が樫井川に向かって傾斜しており、中世に棚田造成されたものが現在に至っている。調査区南西端のB3－13－D8－b5から樫井川にかけては約２ｍの段差を持っており、樫井川の氾濫源にあたると思われる。

土層の基本的な堆積状況は、耕作土、床土の下層は黄灰褐色土、灰褐色土が相互に堆積している。土層中には鉄分の沈着がみられ、瓦器片等が出土する。中世に開発された水田相当層であると考えられる。さらに下層では、部分的に黒褐色の粘質土層がみられる。調査区北側のB3－13－B6－i1からB3－13－B6－j3の範囲では層の厚さ約10㎝堆積しており、北へ向かって下がっている。

須恵器片、土師器片がわずかに出土しており、古墳時代の包含層である。さらに調査区中央部のB3－13－C8－j1付近では約30㎝の黒褐色粘土層がみられる。調査区北側にみられる堆積土より粘性が強く、上面に稲株の痕跡がみられる。013などの中世の遺構はこの面から切り込まれる。

この層からは弥生土器が出土しており、部分的に弥生時代の包含層が認められる。

B3－13－C6－a6からB3－13－C6－c10にかけては流路堆積がみられる。砂層から弥生時代後期の遺物をが出土している。

２．遺構と遺物

001　B3－13－B6－i1,i2、調査区北端で検出したほぼ南北方向にのびる溝である。中世の包含層の下層に一部黒色の粘質土層が堆積しており、その下層で検出した。南側に向かって不定型な広がりをみせる。幅約60㎝、深さ50㎝、埋土は黒褐色粘質土で、出土遺物は保存状況の悪い土師質土器片が出土する。

002　B3－13－B6－i1で検出した径20㎝、深さ10㎝をはかるピットである。埋土は黒褐色粘土で、柱痕は検出できなかった。

003　B3－13－B6－i1で検出した径20㎝、深さ15㎝をはかるピットである。埋土は黒褐色粘土で、柱痕は検出できなかった。002ともに建物を構成するものではない。

004　B3－13－B6－j4で検出した円形の土坑である。径３ｍをはかり、北西半分はトレンチ外につづく。底面は皿状に落ち込み深さ20㎝をはかる。埋土は暗灰褐色れき混じり粘土で、遺物は出土していない。

005　B3－13－B6－j4で検出した不定形の土坑である。大半はトレンチ外につづいており、規模はわからない。深さは、深い所で80㎝をはかる。埋土は暗灰色粘土で、先端の焦げた木片１点が出土する。（第６図13）

006　B3－13－B6－i3,i4で検出した不定形の落ち込みである。深さは深い所で90㎝をはかり埋土は黒色粘土層である。001と埋土は同質であり曲がりくねった一連の溝の可能性がある。埋土から須恵器片が出土している。

006出土遺物（第６図６，７）

（６）は須恵器杯蓋で、口縁端部のみ出土した。復元径14㎝，残存器高2.9㎝をはかる。胎土は密で、色調は灰色を呈する。（７）は土師器杯で口縁部片である。復元径10.7㎝，残存器高3.4㎝をはかる。胎土は密で、色調は黄橙色を呈する。内外面とも調整は不明である。

007　B－13－B6－j5，C6－a5，a6で検出した溝である。幅30㎝、深さ50㎝をはかり、埋土は暗灰色粘質土である。断面形状はＶ字形を呈する。底面より少し上層で、炭の堆積層が認められた。遺物は出土していない。

008　B－13－C6－a5，a6で検出した東西方向の溝である。幅50㎝、深さ15㎝をはかり、埋土は暗褐色粘質土である。007によって切られる。土師器片が数点出土している。

008出土遺物（第６図12）

（12）は土師器鉢で体部から口縁部にかけて出土した。復元径20.9㎝，残存器高7.0㎝をはかる。胎土は密で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

010　B3－13－C7－g5，g6で検出した溝である。幅30㎝、深さ5㎝をはかり、埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

011　B3－13－C7－h7で検出した瓢箪形をした土坑である。長径70㎝、短径30㎝をはかる。埋土は　　である。遺物は出土していない。

013　B3－13－C7－i8，i9で検出した、大型の土坑である。平面形状はよくわからないが、調査区内では径7.0m、深さ0.6mをはかる。埋土は、暗灰色粘土からシルトで埋土中より、瓦器椀が出土した。底面は砂層で、地下水が沸き出しており、中世の野井戸の可能性が考えられる。

013出土遺物（第６図14～16）

（14）～（16）はいずれも瓦器椀である。（14）は内面にらせん状暗文を施し、外面は口縁端部のみ横ナデ、体部外面は指押さえが残る。高台はほとんど退化しており、断面が三角形をなす。復元径13.9㎝，器高3.9㎝、高台径3.1㎝をはかる。胎土は密で、色調は暗灰色を呈する。（15）は内面にらせん状暗文を施し、外面は口縁端部のみ強い横ナデ、体部外面は指押さえが残る。高台はほとんど退化しており、断面形状は丸い。復元径14.0㎝，器高3.6㎝、高台径3.3㎝をはかる。胎土は密で、色調は暗灰色を呈する。（15）は見込みに平行、内面にらせん状暗文を施し、外面は口縁端部に一部暗文がみられ、体部外面は指押さえが残る。高台部は欠損している。復元径14.0㎝，残存器高4.9㎝、をはかる。胎土は密で、色調は暗灰色を呈する。

014　B3－13－C7－i9で検出した溝である。013に注ぎ込むもので、南側で削平される。幅10㎝、深さ５㎝をはかる。埋土は黄褐色砂で、出土遺物はない。

015　B3－13－C8－j1で検出された竪穴住居跡である。平面形は明らかでないが、径９ｍをはか

る円形と思われる。深さは50㎝をはかり、埋土は黒褐色粘質土が基本となる。

015出土遺物（第６図１～５）

（１）～（５）は弥生土器である。（１）は壷の口縁のみ出土しており、床面の直上で検出した。（２）（３）は甕の口縁部片である。（４）は甕の口縁部から体部にかけて出土した。内外面の調整は不明である。（５）は蛸壷の体部上半から口縁部にかけて出土した。いずれも弥生時代後期の遺物である。

016　B3－13－C8－j1の015上面で検出された土坑である。

017　B3－13－C8－j1の竪穴住居跡床面で検出された円形の土坑である。径60㎝、深さ80㎝をはかり、断面形はすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色微砂で下層に炭層、灰層が認められることから、炉跡の可能性が考えられる。

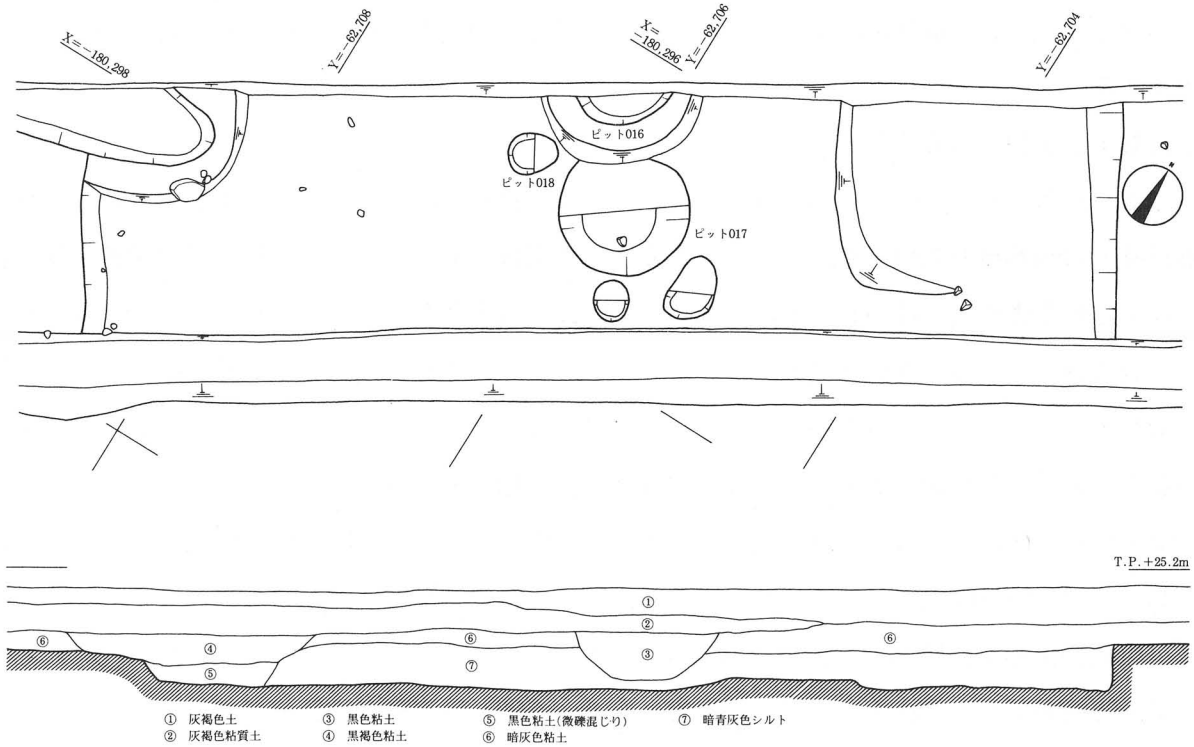
018　B3－13－C8－j1の竪穴住居跡床面で３個のピットを検出した。いずれも径は20㎝程度で比較的浅いものである。埋土は黒褐色粘土で、出土遺物はない。柱穴とは考えにくい。

019　B3－13－C8－j1の015上面で検出された楕円形を呈する土坑である。短径30㎝、長径約80㎝をはかる。埋土は暗灰色粘土層で、出土遺物はない。

020　B3－13－C8－j1、j2で検出された楕円形を呈する土坑である。短径30㎝、長径約80㎝をはかる。埋土は暗灰色粘土層で、出土遺物はない。

021　B3－13－D8－a2で検出されたピットである。径20㎝、深さ20㎝をはかる。埋土は黒褐色粘土で出土遺物はない。

022　B3－13－D8－a2で検出された楕円形を呈する土坑である。短径20㎝、深さ20㎝をはかる浅い皿状の土坑である。出土遺物はない。



第３図　竪穴住居015平面・断面図（1/50）

023　B3－13－D8－a3で検出されたピットである。径20㎝、深さ20㎝をはかる。埋土は黒褐色粘土で、柱痕は認められなかった。出土遺物はない。

024　B3－13－D8－a3, b3で検出された落ち込みである。

025　B3－13－D8－a3で検出されたピットである。径20㎝、深さ20㎝をはかる。埋土は黒褐色粘土で、柱痕は認められなかった。出土遺物はない。

026　B3－13－D8－a3, b3で検出された落ち込みである。

027　B3－13－D8－a3で検出されたピットである。径20㎝、深さ20㎝をはかる。埋土は黒褐色粘土で、柱痕は認められなかった。出土遺物はない。

流路　調査区中央部北側で流路を検出した。流路は３条あり、すべて西に向かって流れる。出土遺物からみて、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての流路であると思われる。

流路１出土遺物（第６図８～10）

（８）～（10）は流路１から出土した古式土師器である。（８）は高坏で杯部のみ出土した。内外面とも残りはよくないがミガキを施している。杯部径は15.8㎝、残存高7.0㎝をはかる。胎土は密で、黄橙色を呈する。（９）は壷の口縁部で口縁に波状文と円形浮文を施す。口縁部復元径は18.0㎝、残存高2.0㎝をはかる。胎土は密で浅黄橙色を呈する。（10）は甕の底部で叩きの成形痕をわずかに残す。弥生時代の終末から古墳時代の初頭の遺物である。

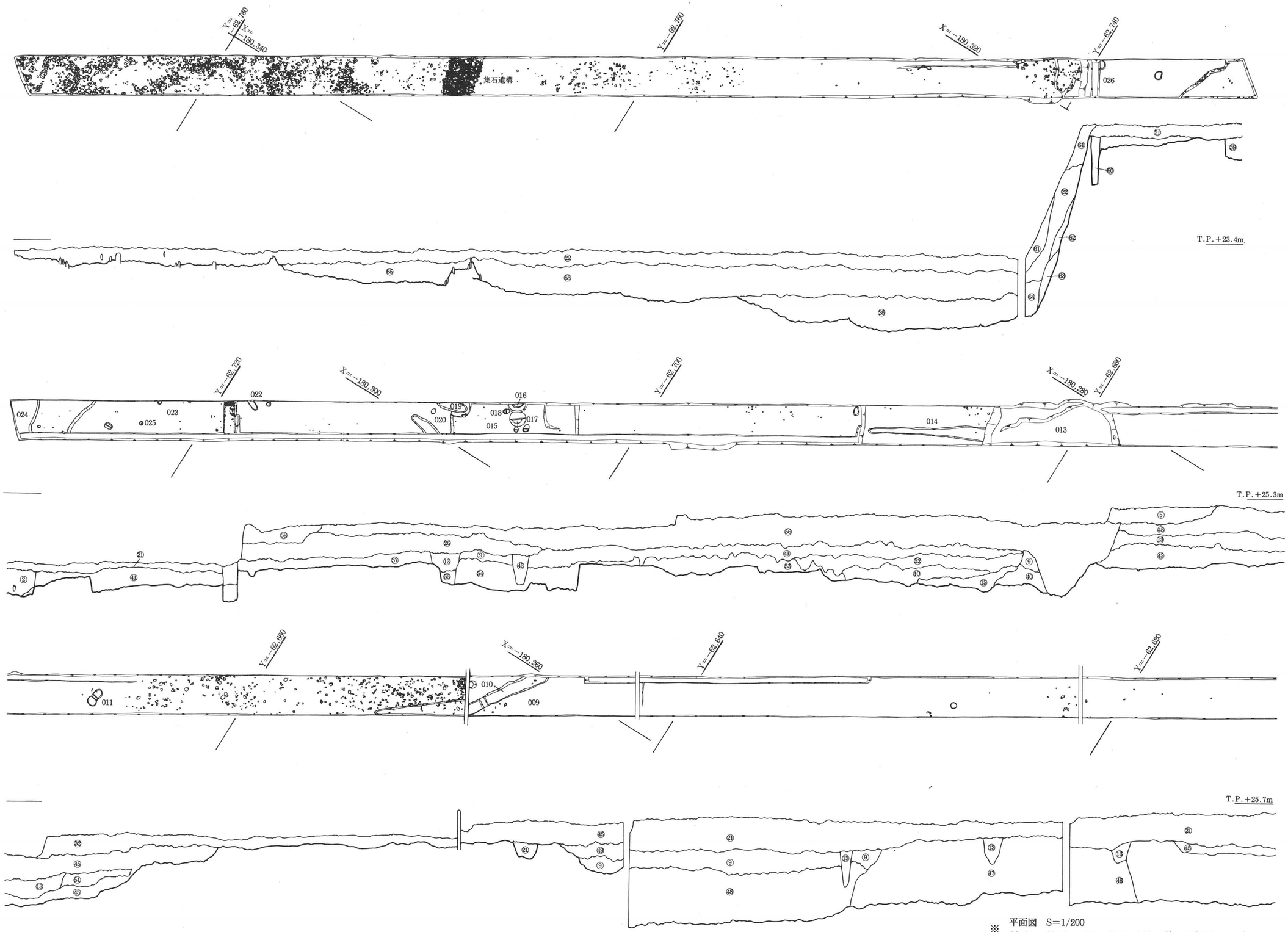
流路３出土遺物（第６図11）

（11）は高坏の脚部のみの出土で、かなり摩滅しており、調整等は不明である。

集石遺構　調査区南端の樫井川氾濫源に位置するところで、樫井川に平行して、幅約2.0m高さ25㎝の石を堤状に盛り上げた遺構を検出した。上面はほぼ平坦に仕上げており、縁にやや大きめの石を並べている。遺物が出土していないため時期は不明であるが、覆土からは近世の磁器片が出土する。

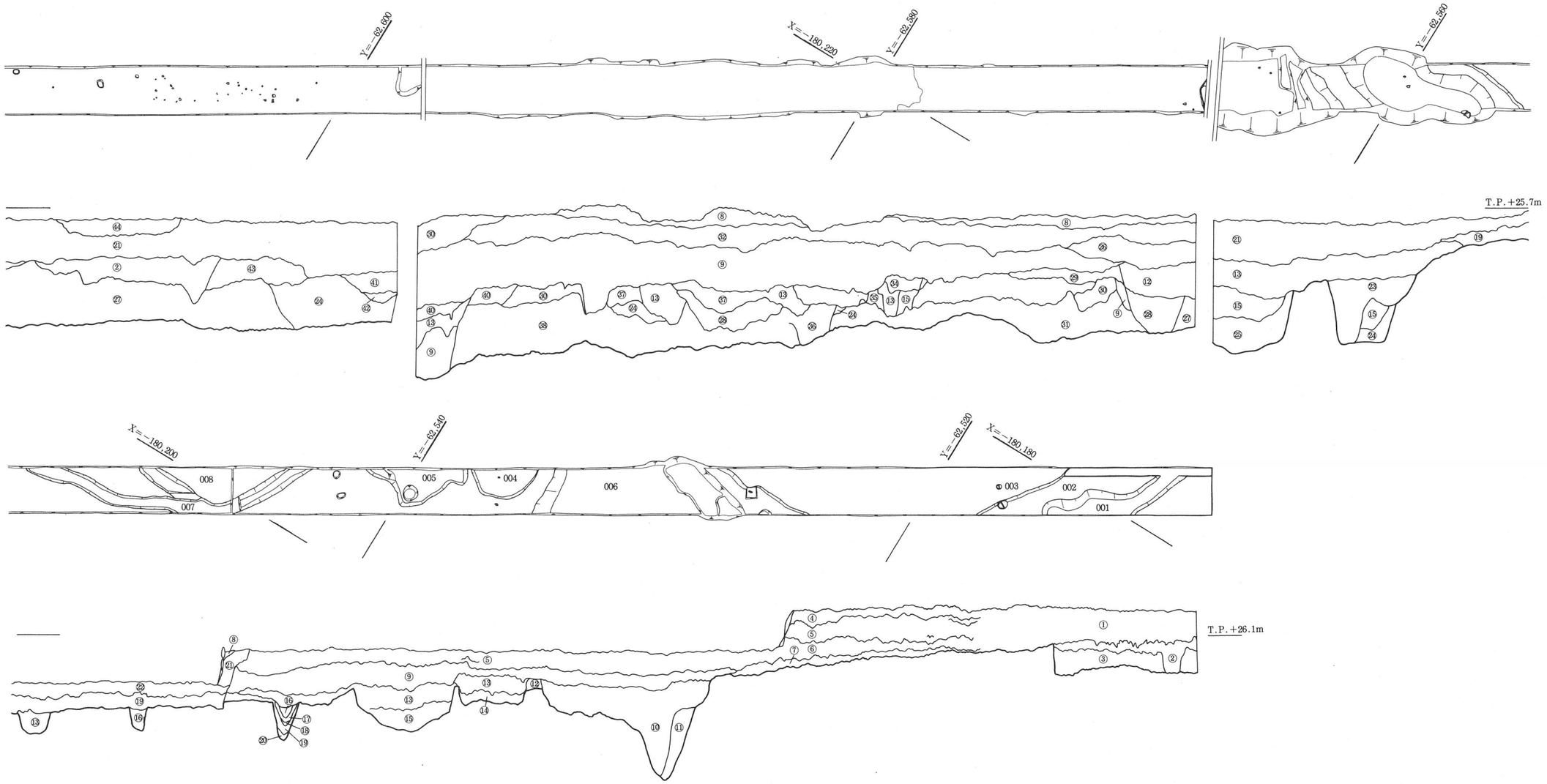
包含層出土遺物（第６図21～35）

（21）から（24）は弥生土器の底部でいずれも黒褐色粘土層からの出土である。（17）は須恵器杯身で口縁端部が欠損する。（19）は瓦質土器の底部である。平底で全体にナデ調整を施す。（18）は焼き締め陶器鉢の底部破片である。（25）は復弁蓮華文軒丸瓦で花弁の中の子葉をさらに２つに分けている。外区には珠文帯をめぐらしており、外縁は素文の直立縁である。平安時代後期を考えている。瓦の出土量は少ないため移動してきたものであろう。（26）（27）は土師質小皿ででいずれも口縁端部を強くなでて口縁部を作り出している。（28）は瓦器の小皿で見込みに暗文がみられる。（29）（30）は土錘である、（31）～（35）は中国製輸入磁器である。（31）（33）（34）は口縁端部が玉縁状を呈する白磁碗で、福建省廈門碗窯系のものと考えられる。玉縁が比較的緩やかに肥厚するもの（31）、かなり下がった位地で肥厚するものがあり（34）ある程度の時期幅が考えられる。（32）は白磁の皿で、（35）は青磁碗の底部である。



※ 平面図　S=1/200
断面図　横 S=1/200　縦 S=1/40（第5図参照）

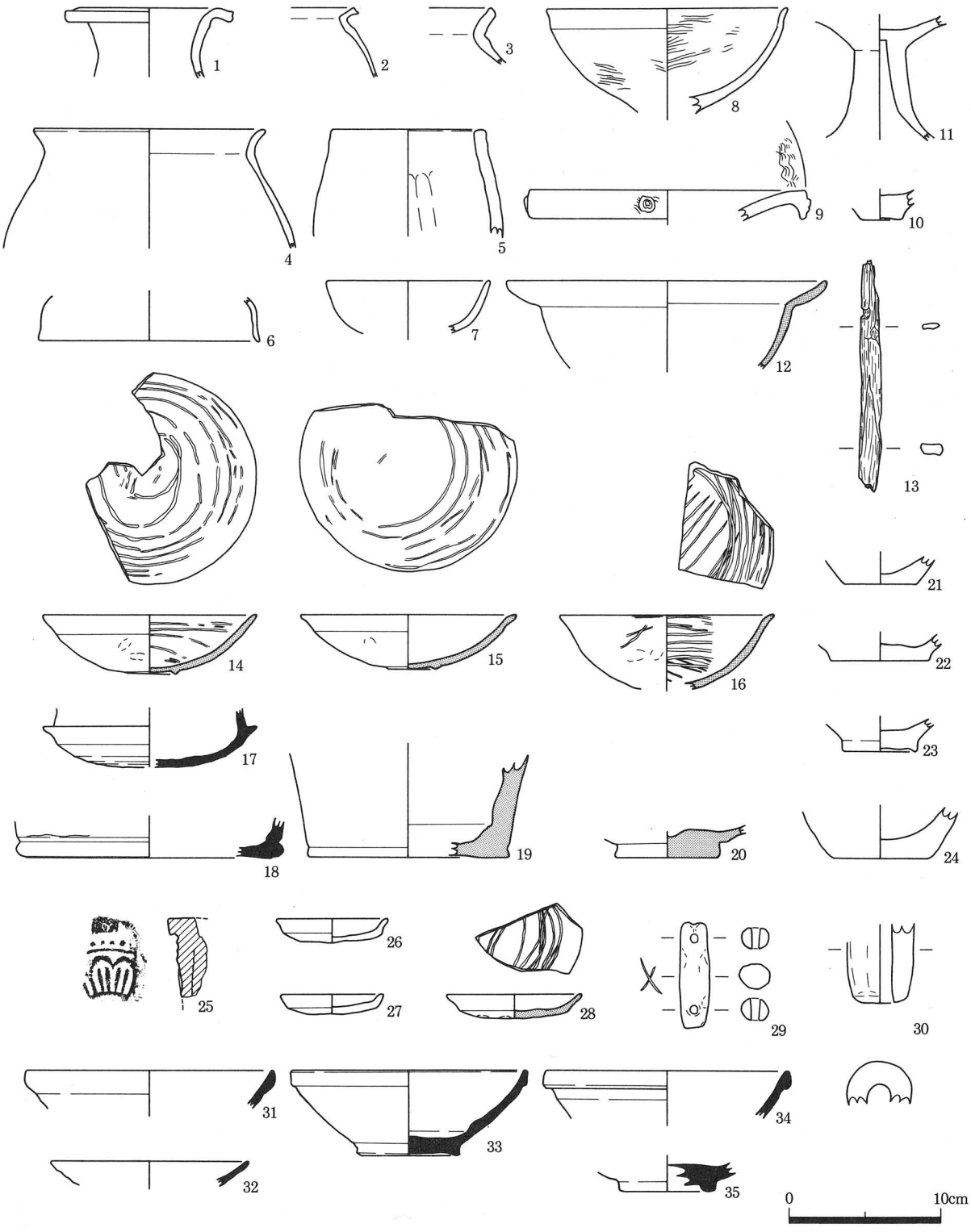
第4図　調査区平面図・断面図（1）



1 灰褐色砂質土
2 黒褐色土
3 暗茶褐色土
4 黄褐色砂質土
5 灰黄褐色土
6 淡灰褐色粘質土
7 暗茶褐色土(ベース土)
8 耕土
9 暗灰色粘土
10 黒灰色粘質土
11 暗褐色シルト
12 暗褐色土
13 黒褐色粘土
14 黒褐色礫混じりシルト
15 暗灰色シルト
16 暗灰褐色シルト
17 暗灰色細砂
18 炭層
19 暗灰色粘質土
20 黄灰色砂
21 灰褐色土
22 黄灰色土
23 黒灰色シルト
24 黄褐色砂礫
25 褐色砂礫
26 灰褐色粘質土
27 黄灰色シルト
28 青灰色粘土
29 灰黒色粘土
30 灰黄色粘土
31 黄褐色礫～シルト
32 灰黄色砂質土
33 淡灰褐色粘土
34 暗灰色砂
35 灰色砂
36 黄褐色砂
37 灰褐色砂
38 黄灰色粘質土
39 淡灰色シルト
40 灰黄色砂
41 暗灰褐色粘土
42 暗褐色砂
43 黒褐色土(礫混じり)
44 淡灰褐色土
45 黒色粘土
46 褐色礫
47 礫
48 黄褐色シルト
49 黄灰色粘土
50 灰褐色土(砂礫含む)
51 黄褐色粘土(黒色粘土ブロック含む)
52 黒灰褐色粘土
53 黄灰色シルト
54 暗青灰色シルト
55 黒色粘土(微砂混じり)
56 灰褐色土(やや砂礫含む)
57 暗灰色粘土(上面稲株痕)
58 黄灰褐色土
59 暗灰色砂礫
60 暗褐色粗砂混土(近世～)
61 腐植土
62 灰色粘土(礫混じり)
63 青灰色礫混じり土
64 暗青灰色粘土
65 暗黄灰褐色土

※ 平面図 S=1/200
断面図 横 S=1/200 縦 S=1/40

第5図 調査区平面図・断面図（2）


1
2
3
8
11
4
5
9
10
6
7
12
13
21
14
15
16
22
17
23
18
19
20
24
25
26
27
28
29
30
31
33
34
32
35
0
10cm

第6図　出土遺物実測図

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居1棟を検出した。三軒屋遺跡では遺跡の西側に比較的集中して縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構が見つかっていた。なかでも樫井川の右岸に遺構が集中してみられる。最近の調査成果では、遺跡北西側でも住居跡や方形周溝墓が検出されており、今回検出した住居跡も含めて、いくつかのブロックに分散されてみられるようである。

古墳時代の前期では流路から遺物を検出しており、上流となる東側に遺構の存在が考えられる。また、中世には水田として開発された様子がうかがわれる。ただし、包含層から青磁、白磁や瓦が出土しており、試掘の際に検出された白磁碗を副葬した土坑墓の存在からも、調査区から東側には集落や寺院、墓域の存在が考えられよう。

報　告　書　抄　録

ふりがな	さんげんやいせきはっくつちょうさがいよう
書名	三軒屋遺跡発掘調査概要
副書名	農用地整備事業下村地区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	森屋直樹
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	大阪府大阪市中央区大手前二丁目　06－941－0351
発行年月日	1998.3.20

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
三軒屋遺跡（さんげんやいせき）	泉佐野市（いずみさのし） 上之郷（かみのごう）	27213	13	62° 65′ 00″	180° 24′ 00″	平成9年 12月26日 ～ 平成10年 3月20日	600	農用地整備

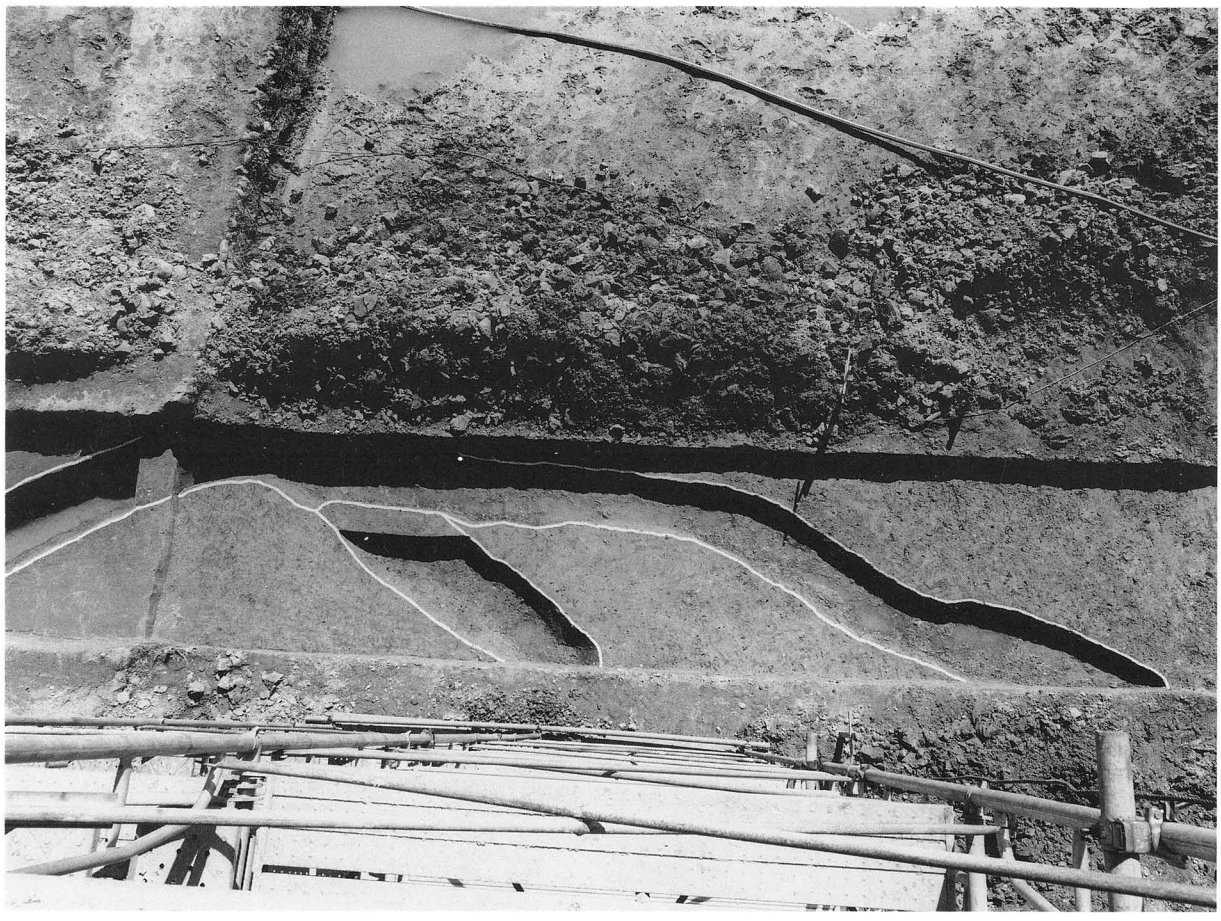
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三軒屋遺跡	集落	弥生時代 鎌倉	竪穴住居 土坑 土坑	弥生土器 瓦器・青磁・白磁	

図　　版

調査区北半部全景（南から）

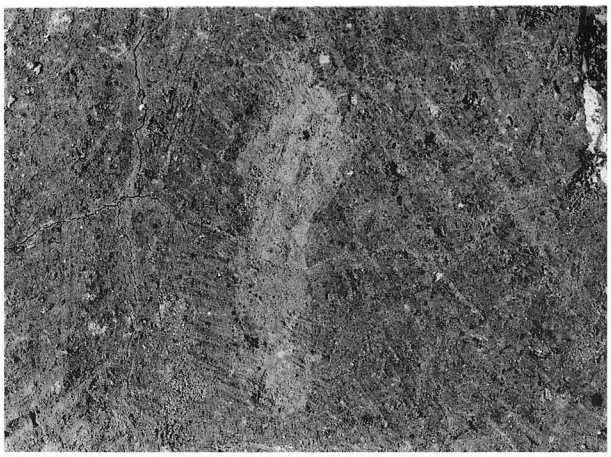
調査区北端部（南から）

溝001（北から）



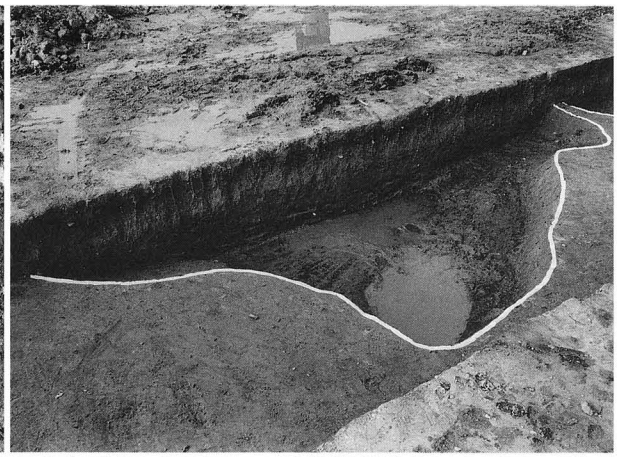
溝007・008（西から）

溝007、土坑004・005（南から）



（左上）足跡検出状況

（左下）足跡完掘状況



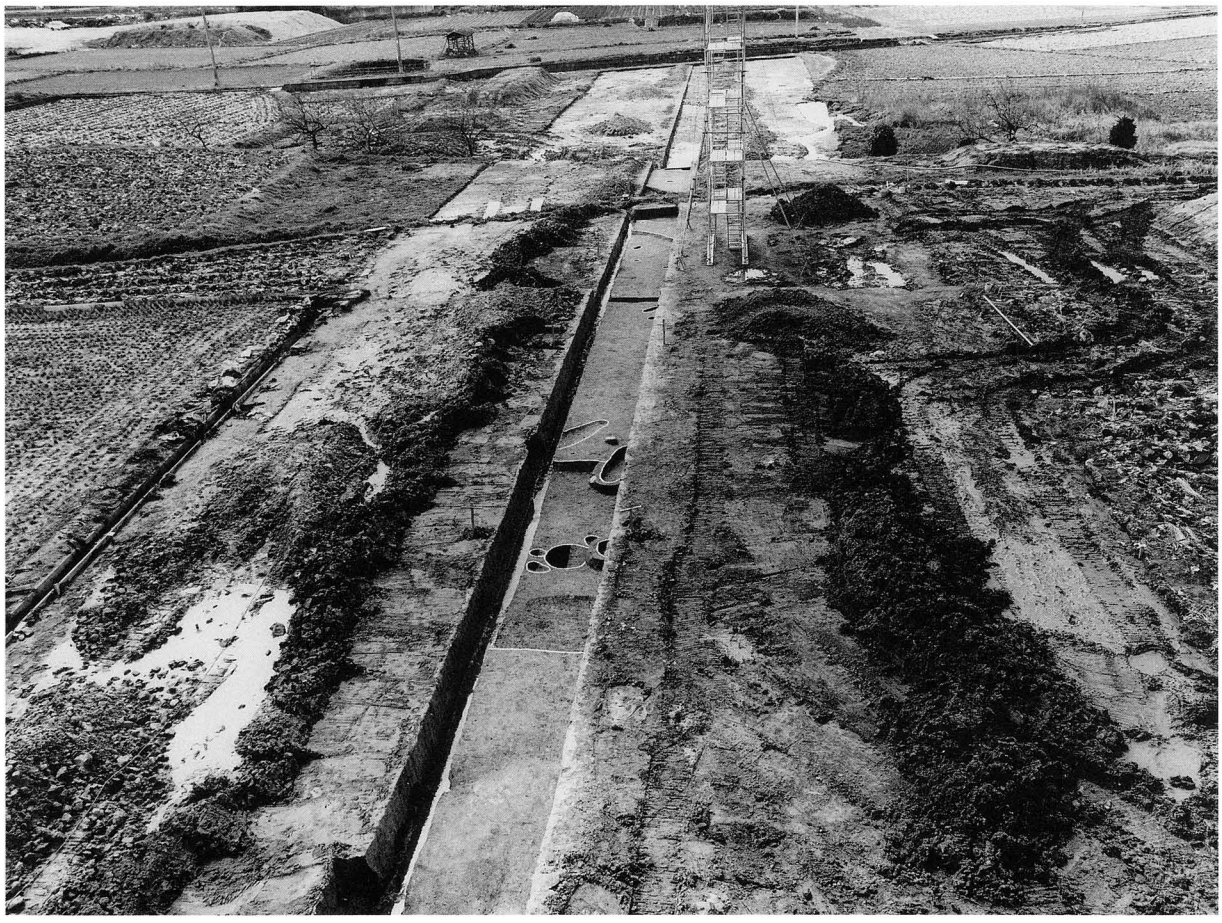
（右上）土坑005（南から）

（右下）溝002（北から）

流路001（北から）

溝010（西から）

調査区南半部（北から）



調査区南端部（北から）

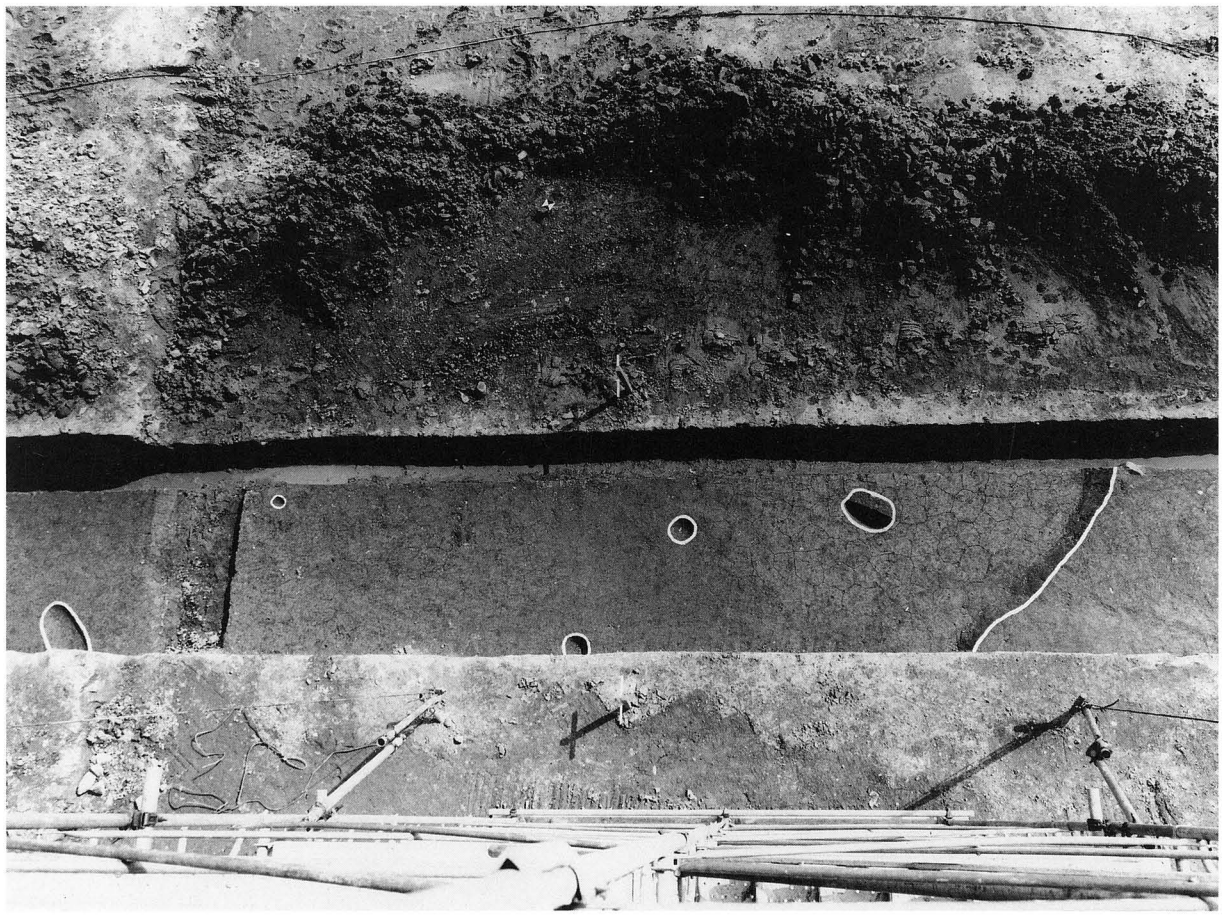
土坑013（南から）

竪穴住居015（南から）

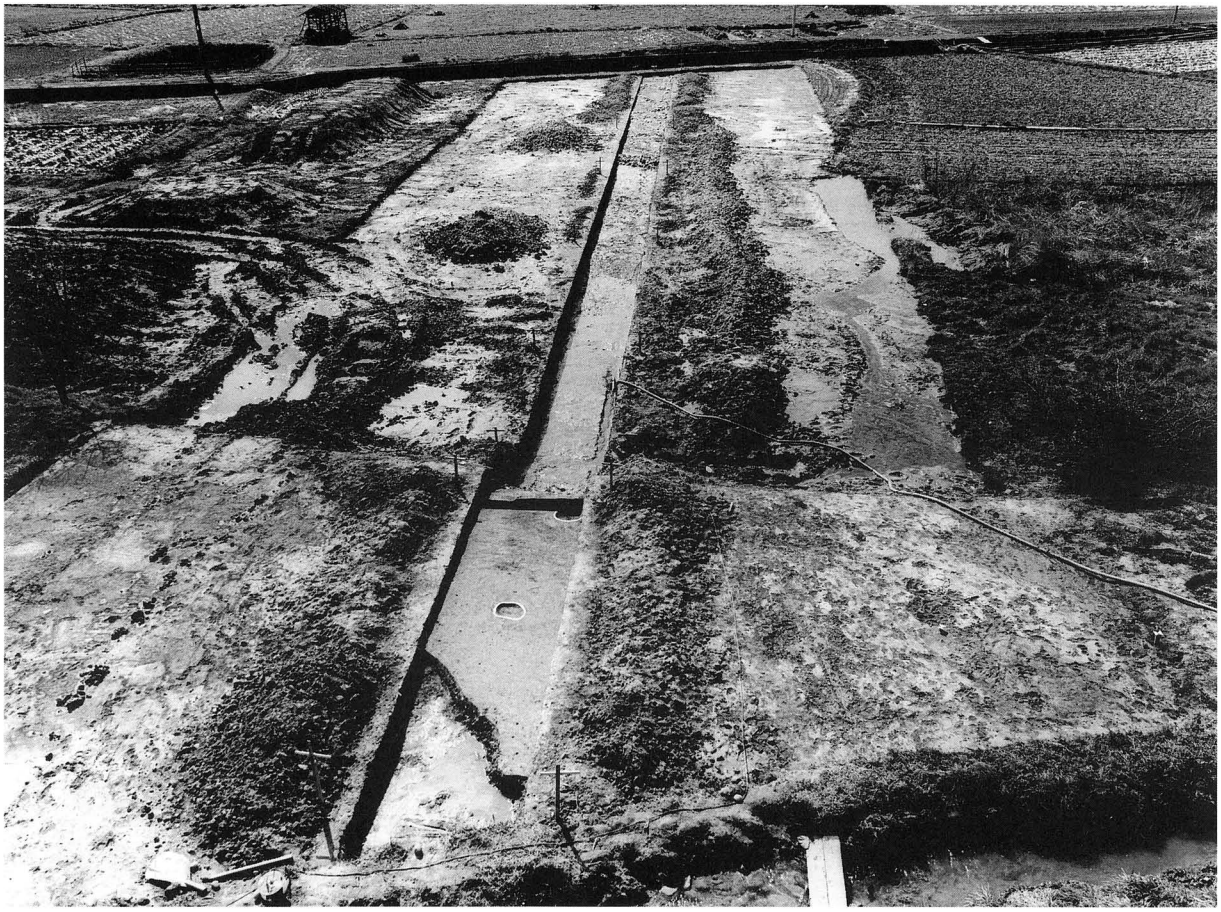
竪穴住居015（東から）

竪穴住居015（南から）

竪穴住居015中央ピット017断面（南から）



ピット025周辺（北から）

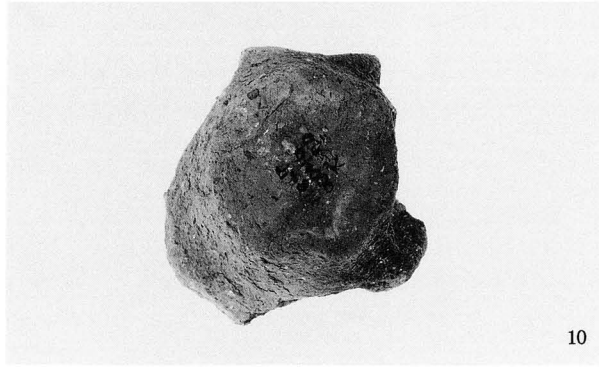


調査区南端部全景（北から）

集石遺構（南から）

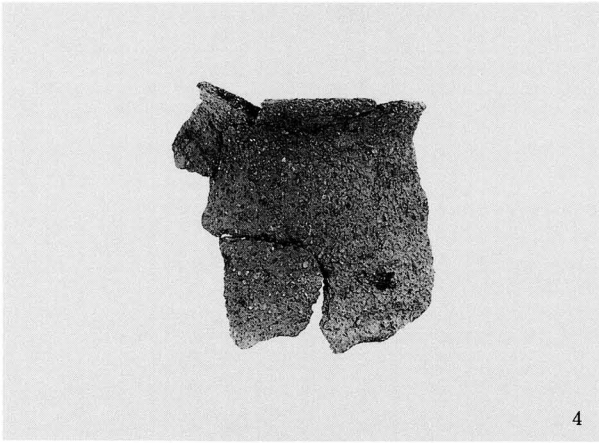
図版10　出土遺物(1)

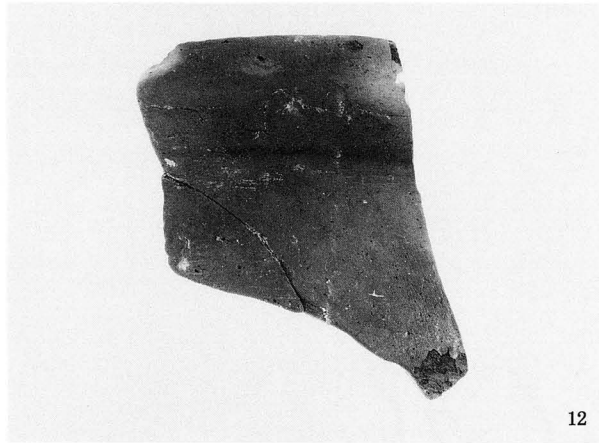
1

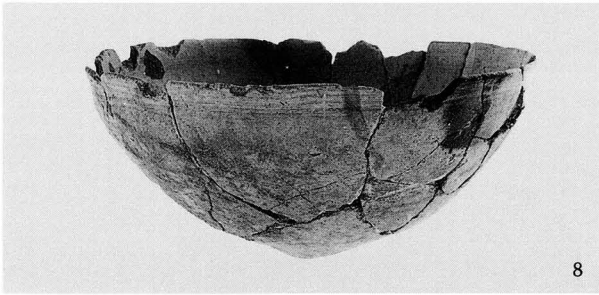

10

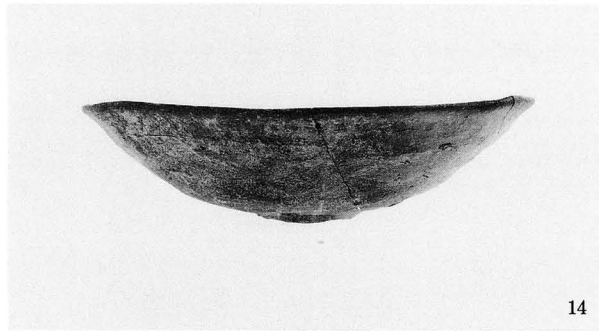
2

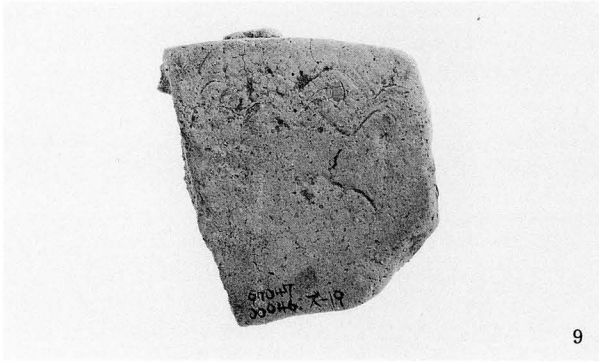
11

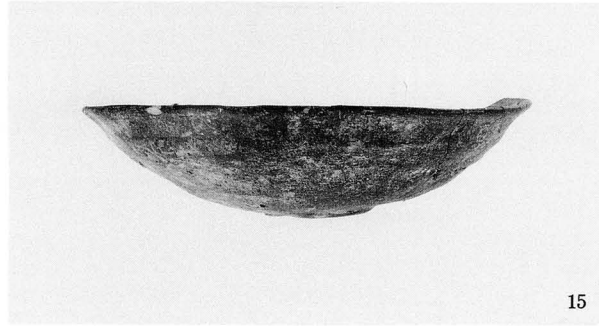

4


12


8

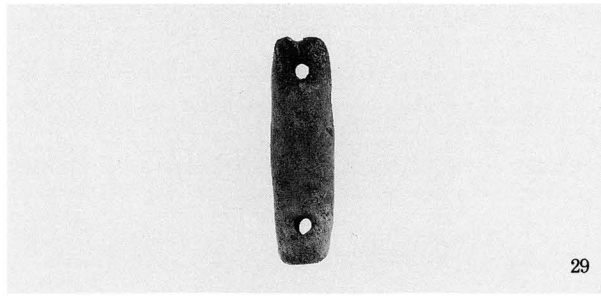

14

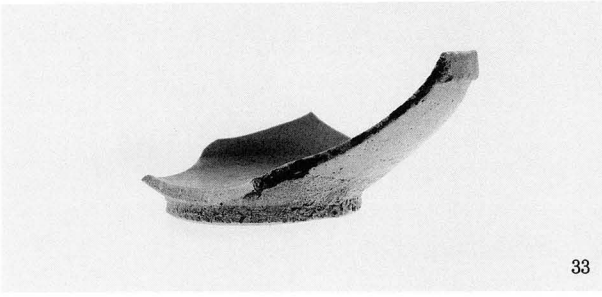

9

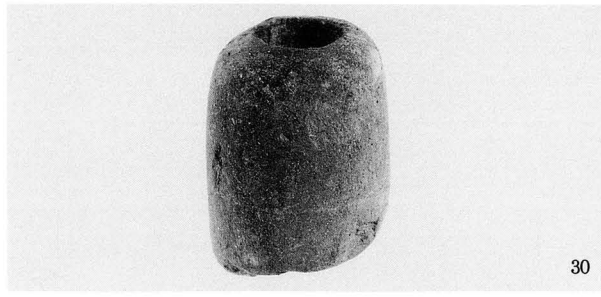

15

図版11　出土遺物(2)

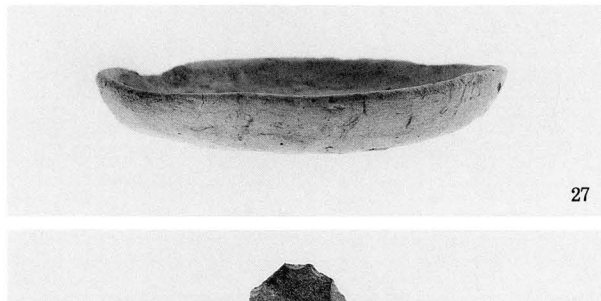
25


29


33

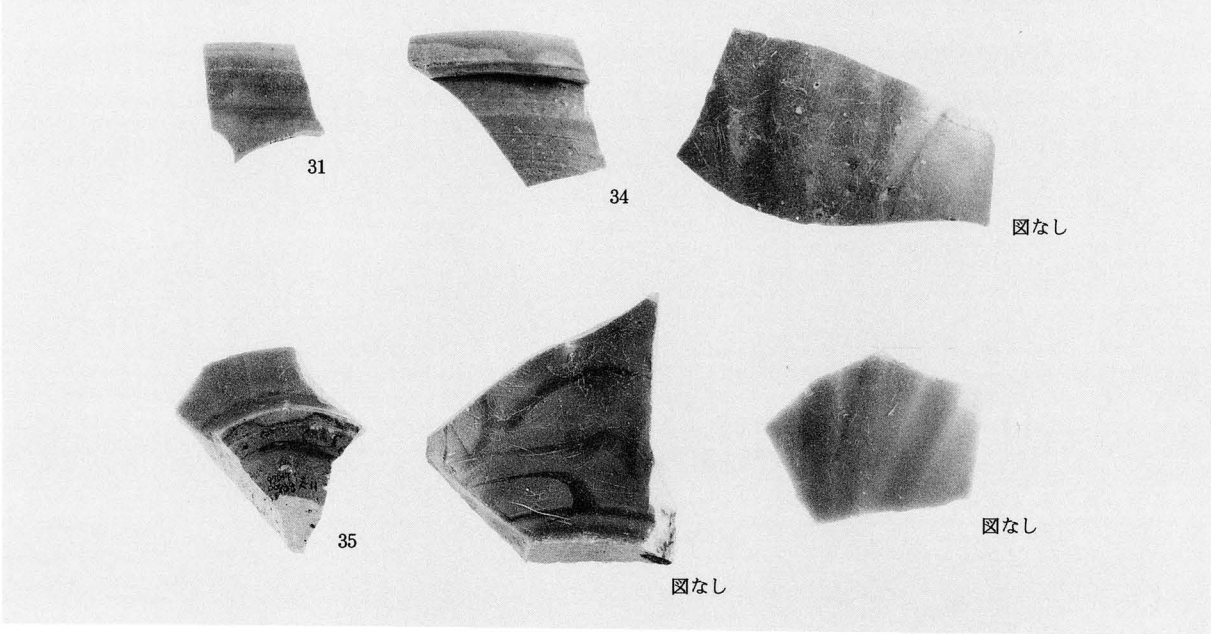

30

26


27

28

図なし


31

34

図なし

35

図なし

図なし